



山岡 勇太

令和5年10月28日から令和6年2月25日まで、特別展「埼玉シェルワールドー貝からひも解く埼玉の自然ー」を開催しました。

貝は、食卓で目にするアサリやホタテガイをはじめ、私たちの暮らしのそばにある身近な生きものです。同時に、様々な色や形をもつ貝は、昔から人々の心を魅了してやまない存在でもあります。

海なし県として知られる埼玉ですが、ひとたび林や池に足を運べば、カタツムリなどの様々な種類の貝を見ることができます。また埼玉県では、秩父盆地をはじめいたるところから、海に生息した貝の化石が見つかります。それらは、今は海なし県の埼玉にも、確かに“失われた海”があったことを私たちに教えてくれます。

このように貝は、味や見た目ですぐ私たちを楽しませるだけでなく、地域の自然を知る上で重要なツールでもあるのです。本特別展では、埼玉県に生息する貝や、貝という生き物がもつ魅力について、5つの章に分けて紹介します。

第1章 貝のいろは

貝は一般的に、貝殻をもつ軟体動物のことを指します。分類学的には、軟体動物門の有殻亜門（貝殻亜門）というグループで、私たちに馴染み深い二枚貝や巻貝をはじめ、タコやイカの仲間やツノガイの仲間、深海に生息するネオピリナの仲間が知られています。

貝は、グループによって体の構造に違いがあるものの、多くの種が石灰質の殻をもつという特徴があります。硬い殻は、外敵や乾燥から身を守るのに役立ちます。この貝殻のおかげで、貝は化石として残りやすいという側面もあります。日本で

は2003年までに7,270の化石種が報告されていますが、これは国内で記載された化石生物の中では突出して多く、全体の約半数にも及びます。

第2章 貝化石でたどる埼玉3億年の海

埼玉県では、約3億年前の古生代から新生代に至るまで、様々な時代の海に生きた貝の化石が見つかります。時にそれらは、貝が暮らした太古の海の環境を知る重要な手がかりとなります。

例えば、深谷市小前田にある小園層（約1,700万年前の地層）からは、ヨコヤマビカリアなどの、熱帯や亜熱帯の干潟に生息した貝の化石が発見されています。これらの化石は、当時の埼玉県にも暖かく浅い海があったことを物語っています。

また、入間川中流域にある仏子層（約250万～140万年前）からは、オキシジミなどの現在の内湾干潟に生息する貝化石が多く産出します。これらの貝化石が見つかる層の上下では、アケボノゾウの足跡化石など、陸上の環境を示す化石も見つかっています。つまり、仏子層が堆積した当時のこの場所は、内湾と陸が繰り返し移り変わる環境であったことがうかがえます。

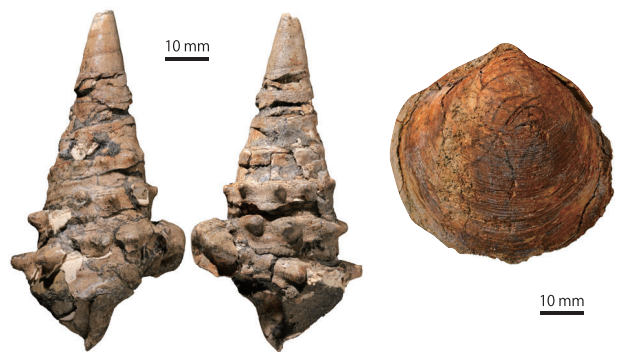


写真1. 小園層産のヨコヤマビカリア（左）と仏子層産のオキシジミ（右）

第3章 関東地方の貝

東の関東平野から西の関東山地まで、2,500 m近い高低差がある埼玉県。起伏に富んだ地形は、県内に豊かな生物環境を育んできました。県内ではこれまでに143種の淡水産・陸産貝類が報告されています。中でも秩父帯の石灰岩が多く分布する標高800～1,600 mにかけての山地は、貝の種類が県内で最も多いエリアです。このような場所には、ヤグラギセルなどの石灰岩地を好む陸貝が生息します。一方で平野部から丘陵部では、タニ

シ類やイシガイ類など、水田や川などに生息する淡水性の貝が多く見られるようになります。

関東近県に目を向けると、東京湾のような内湾、九十九里浜のような砂浜、相模湾のような深海まで様々な地形が存在しますが、そこには、それぞれの環境に適応した貝が生息しています。例えば、内湾の砂底に生息するアサリやハマグリは、砂の中に潜って生活しており、干潮で海水が引いても生きていけます。一方、外洋に面した岩礁には、アワビの仲間など、波にさらわれないよう岩にしっかりと付着することができる貝が生息します。

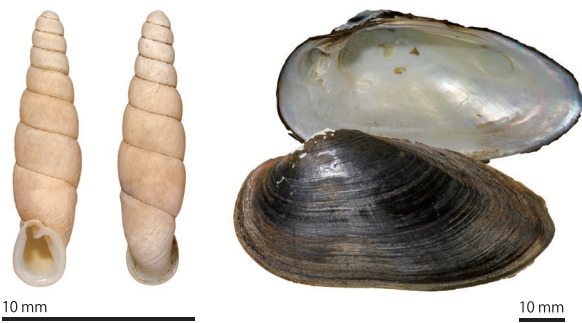


写真2. ヤグラギセル (左) とイシガイ (右)

第4章 世界の貝

世界には、驚きの生態をもつ貝や、様々な形や色模様の貝が生息しています。深海底から吹き出す熱水や冷湧水には、硫化水素など地球内部の有毒な物質が含まれています。こうした場所には、シロウリガイ類やシンカイヒバリガイ類などの特異な生態の貝が生息しています。彼らは、消化器官が退化する傾向にある一方で、発達した大きなエラをもっています。このエラの細胞に、硫化水素を食べる硫黄細菌などの化学合成細菌を住まわせており、細菌が硫化水素から生み出した栄養を利用することで生きています。

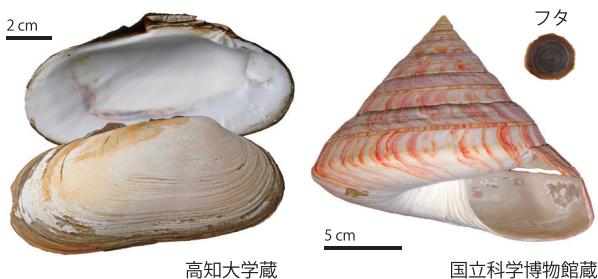


写真3. シロウリガイ(左)とリュウグウオキナエビス(右)

また美しい貝としては、深海に生息するオキナエビスの仲間が有名です。彼らは、4億年もの昔からその姿を変えていない“生きた化石”とされています。その美しさと入手の難しさから“長者貝”とも呼ばれ、中でも大型のリュウグウオキナエビスは、貝としては史上最高額の360万円で落札されたことがあります。

第5章 世界の貝

人は古くから、貝を生活の様々な場面で取り入れてきました。日本でも紀元前から食糧として利用されており、その痕跡が各地の貝塚などから見つかっています。日本における貝の生産量(2021年)は、中国に次いで世界2位の721,140トンにもなります。中でもホタテガイは、国内で最も多く生産される貝で、北海道を中心に水揚げされています。養殖では、瀬戸内海を中心にマガキが多く水揚げされます。

また、貝は食糧に留まらず、古くから人々の暮らしを豊かにするための道具として利用されてきました。中でも真珠は、貝によってつくられる宝石として有名です。真珠は、アコヤガイなど殻の内側に真珠層をもつ貝によってつくられます。真珠層は、薄いアラレ石の結晶がシート状に積み重なったもので、この真珠層が、貝の中に入った異物を中心に球形に成長することで、真珠がつけられます。



写真4. アコヤガイと真珠

おわりに

本特別展では、ここでは紹介できなかった様々な種類の貝を多く展示しました。今回の展示を通して、貝という生きものの醍醐味や、自然をひも解くひとつのツールとしての面白さが、少しでも伝われば幸いです。

(やまおか ゆうた・学芸員)